

労働政策フォーラム:コメント

2009年6月6日(土):JILPT、日本学術会議

## 若者問題への接近

:誰が自立の困難に直面しているのか

家族社会学の立場から

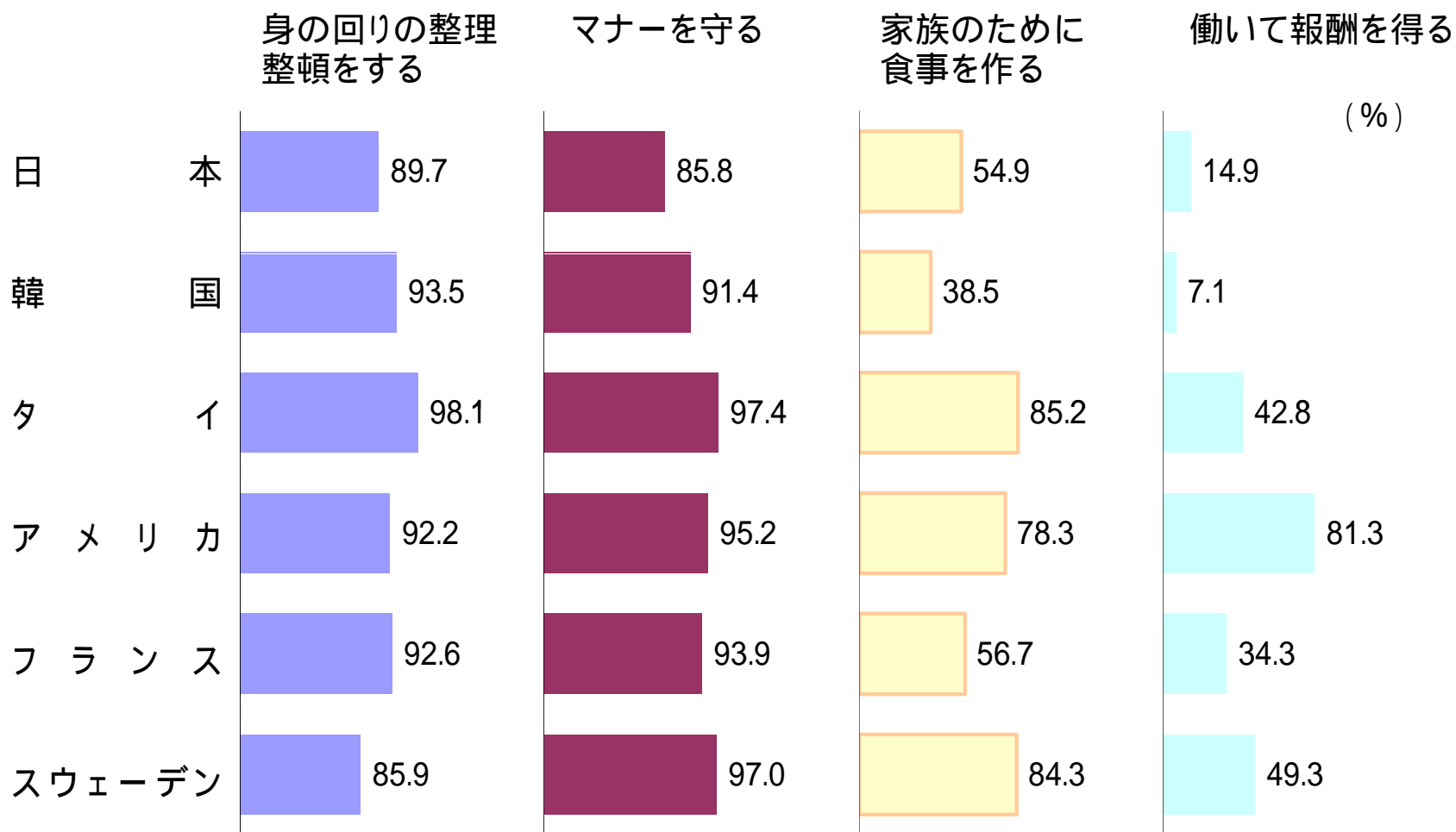
渡辺秀樹 (慶應義塾大学)



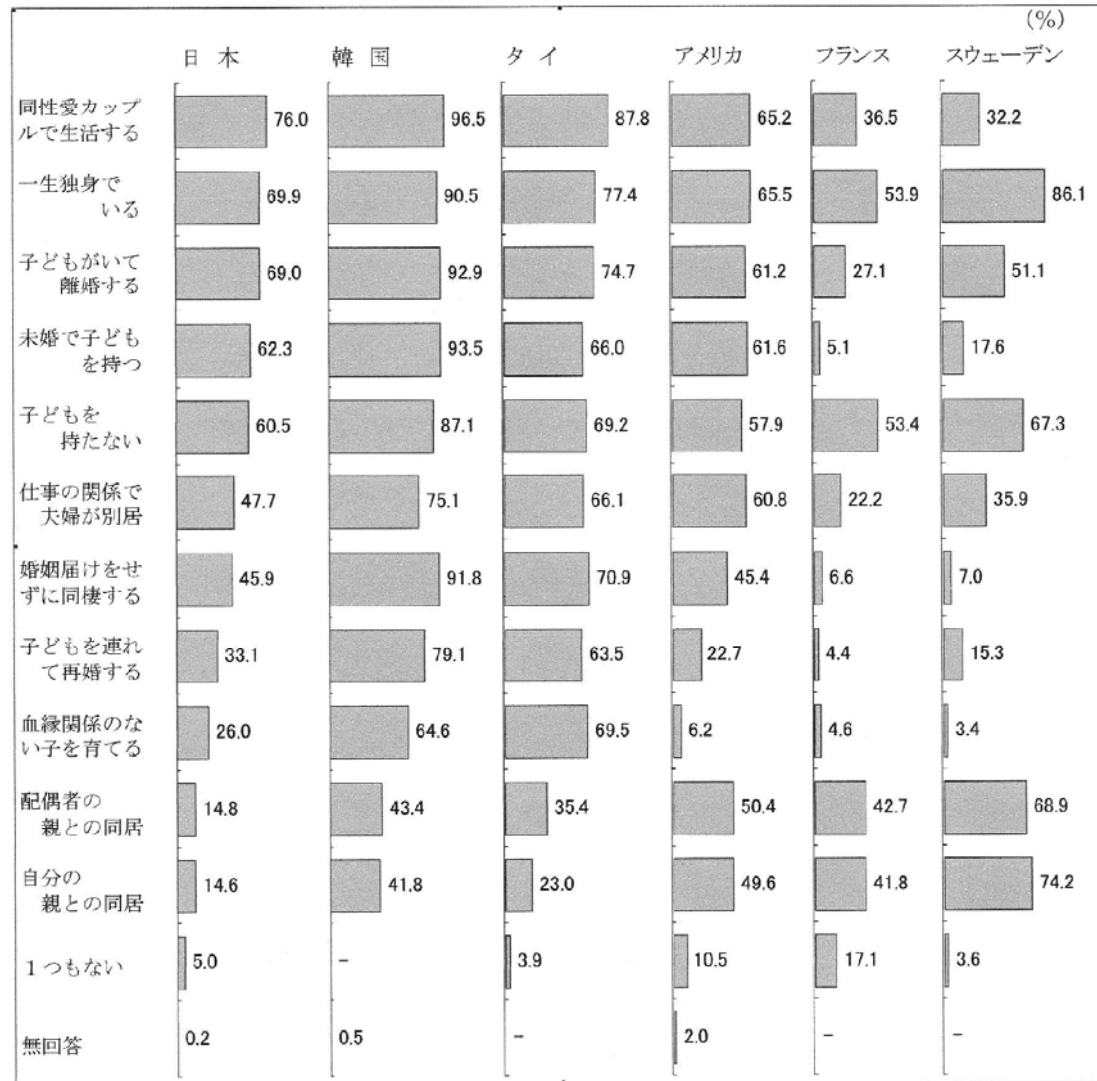
IFR2005 = 家庭教育の国際比較調査(NWEC)より

図1: 15歳のときに一人でできると思うもの

- 日本では「家族のために食事を作る」「働いて報酬を得る」が低く、総じて**子どもの自立への期待は低い**傾向が見られる。



図Ⅱ-3-35 将来子どもにして欲しくない家庭生活像(複数回答)



(国立女性教育会館、2006、『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』、121頁、より。)

0-12歳の子どもの親(保護者)、各国1000人(母親/父親、それぞれほぼ500人)



# 1, 家族 / 親子関係の側面から

自立を期待しない家族文化(国際比較調査から)

- 家族依存・家族次第という状況を考える: 意識と現実とのズレ
- ・ 家族が抱えていた子どもの困難を抱えきれなくなった = 経済的要因
- ・ 家族が抱えていた子どもの困難を抱えなくなった? = 文化的要因
- ・ 地方の疲弊 / 地域格差と親子の空間的分離 = 流動化要因

自立を育まない環境

多様な選択肢を受容しない社会

# 2, 地域ごとの特性に応じた対応

家族以外の居場所の確保:

中間的施設の活性化: 公立図書館からコンビニまで

生活の場としての定時制高校を含めて

参照文献:

- 1、国立女性教育会館、2006、『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』
- 2、岩本茂樹、2009、『教育をぶっとばせー反学校文化の輩たち』、文春新書